

【5月のテーマ】 ツバメの子育て

案内人：伴野茂樹（鳥の博物館市民スタッフ）
・小田谷嘉弥（鳥の博物館学芸員）



▲ツバメの巣と巣立ち間近のヒナ。1巣あたり3～7卵を産んで育てる

ツバメは、翼と尾の長い小鳥で、日本では主に夏鳥として渡来します。手賀沼周辺には3月下旬ごろに渡ってきて、9月下旬ごろまで見られます。人家の軒先などに巣を作る、私たちに最も身近な鳥のひとつです。今回は、ツバメの繁殖行動の観察を通じて、手賀沼周辺の環境とのかかわりを考えてみましょう。

2021年5月8日（土）

車や自転車に注意しましょう。水田や私有地では、マナーを守って観察しましょう。

ツバメの巣づくり



▲田んぼで巣材となる枯草や泥を集める

ツバメの巣は、泥と枯草などを人家の壁に張り付けて作られます。巣材となる泥は、ちょうど田植えを迎えて水の入った田んぼで調達します。巣は雌雄が協力して1週間ほどで作ります。前の年に使った巣を補修して使うこともしばしばあります。

ツバメと水田・手賀沼の関係



▲長い尾でバランスをとって虫を捕まえる

ツバメの餌は昆虫で、ハエやトンボなどの飛んでいる虫を空中で飛びながら嘴を使ってとらえます。こうした昆虫は水辺に多く生息しているので、ツバメの主な餌場は田んぼや沼の上空です。



▲巣立ち後に親の給餌を受けるヒナたち

ヒナが巣立って飛べるようになると、沼沿いのヨシ原でねぐらをとるようになります。ねぐらは多くの個体が集まって、手賀沼でも数千羽のねぐらが見られます。この時期に越冬地に渡るための栄養を蓄え、9月ごろに南に旅立ちます。